



北九州市環境ミュージアム20周年 研究報告

もう一つの 「青空がほしい」

公害克服は婦人会活動だけでなく
高校生も活動していた

静岡大学教授 田宮 縁

知を拓く、生き方を学ぶ 高校生の姿がそこにあった

① 問題と背景

1-1 一枚の写真との出会い	02
1-2 婦人会の公害反対運動	
1-2-1 舞台としての北九州市	03
1-2-2 アクター(主因)と活動場所の整理	03

② もう一つの「青空がほしい」

2-1 「ばい煙防止功労者」として表彰された県立高等学校3校	08
2-2 福岡県立小倉西高等学校社会科クラブの実践 ～もう一つの「青空がほしい」	
2-2-1 目的	09
2-2-2 実践活動の概要	09
(イ) 布による煤塵調査 (ロ) 小学校児童に与える煤塵の影響	
(ハ) 関心調査 (ニ) 工場の煤煙対策についての実態	
2-2-3 結果	14
2-2-4 これからの研究活動	14

③ もう一つの「青空がほしい」アクターへのヒアリング調査

3-1 いくつかの疑問とアクターへのヒアリング調査の必要性	16
3-2 実施方法と資料	
3-2-1 実施日時と場所	16
3-2-2 対象者等	16
3-2-3 方法と資料	16
3-3 結果と考察	
3-3-1 公害調査研究発表会 ～林えいだい氏と高校生との関係性	17
3-3-2 なぜ、広範囲の調査活動が可能となったのか～「北九州市高等学校郷土研究連盟」発足	17
3-3-3 当時の市民の公害に対する認識～当時の空気感と「慣れ」	19
3-3-4 社会科クラブの全容	21
3-3-5 社会科クラブの魅力	23
3-3-6 マスタープランへの影響力	24

④ 誘因となったキーパーソンへのヒアリング調査

4-1 追加調査の必要性	28
4-2 実施方法と資料	
4-2-1 実施日時と場所	28
4-2-2 対象者等	28
4-2-2 方法と資料	28
4-3 結果と考察	
4-3-1 1961(昭和36)年 沖縄での体験から ～アメリカへの憧れと突きつけられた環境問題	28
4-3-2 社会科同好会立ち上げの苦勞～学生運動とは一線を画す	30
4-3-3 社会科同好会の急拡大の背景 ～楽しさを共有できる仲間存在、活動の魅力	30
4-3-4 北九州市との関係性 ～社会科クラブの発展の基盤をつくる	33

⑤ 総括

引用・参考文献	37
謝辞	39

第1章 問題と背景

1-1 一枚の写真との出会い

写真の嬉々とした女性の目は、人々を釘付けにする。学ぶことのよろこびを人々はその瞳から感じ取り、心を動かす。この写真は、ノンフィクション作家であり、当時、社会教育主事として旧戸畑市（現在の北九州市戸畑区）の社会教育を牽引していた林えいだい氏が撮影したものである。

この写真と筆者の出会いは、インドネシアのバンドンである。2016年にバンドンで開催されたESD（Education for Sustainable Development）フォーラムで、ある大学の教員の報告の中で使用されていた。のちにこのフォーラムでの話は、新たな知見でないことを筆者は知ることとなる。



北九州市環境ミュージアムの展示や北九州市ホームページなどをのぞいてみると、さまざまな場面で、公害克服を語る際の「婦人会の活動」とともに添えられている写真だったのだ。いずれにしても、この写真と公害克服の婦人会のストーリーは、北九州市にとどまらず、さまざまな人を通し、世界に発信されているという理解に至った。

また、学校教育に転じると、小学校5年生の社会科のある教科書が目にとまった。「環境をともに守る」という単元である。単元は、「青い空と海を取りもどしたまち」、「公害をなくすために」、「環境首都をめざして」、「きれいな環境を、次の世代のために」、そして、最後にまとめとして「学習課題を確かめよう」で構成されている。「みんなでつくった学習課題」には、「環境を改善するために、北九州の人々はどのような取り組みをしてきたのだろうか」との例示がなされている。文部科学省検定済みのこの教科書は多くの地域で採用されている。もちろん、北九州市も例外でない。

この単元の展開は、「公害克服」→「快適環境都市づくり」（アメニティに配慮した潤いのある都市づくり）→「持続可能な社会づくり」（資源循環都市づくり、低炭素社会づくり）と、環境政策の主な政策課題とリンクしており、歴史をリフレクションし、未来社会をデザインするスタンスが貫かれている。最終的に、学習活動を通して、環境保全を自分ごととしてとらえ自分ができること、また、多くの人が行動するために大切なこと、考え、行動する力の育成をねらっている。要は、グローバルシチズンシップの育成がめざしているものである。また、この単元のまとめとして、「北九州の人々がそれぞれの立場からどのように取り組んだのか、整理しました」という記載の後に、「市民」、「市（市役所、市長）」、「工場」の三つの立場の関係性を図に示し、子ども自身が学習問題の確認することを促している。こちらは、北九州市ホームページ「公害克服の取り組み」の冒頭にあるパートナーシップ（「市民」、「企業」、「行政」）による再生と符合する。また、岸本（2011）は、北九州市における取り組みが成功した要因について、①狭義の北九州方式は、行政と企業間の協議に基づく公害・環境対策をさすが、広義には、行政・企業・市民間の緊密なパートナーシップ、②市行政による積極的なイニシアティブ、③技術基盤強化への弛まぬ努力の3つの要素をあげている。つまり、広義には、公害克服の活動主体としての市民は大きな役割を果たしたということである。

一方、素朴な疑問が筆者の気持ちを動かした。まず、パートナーシップの「市民」の活動は、婦人会だけだったのかという疑問である。活動の記録がまとめられており、証言なども残されている。素晴らしい活動であることはいうまでもないが、婦人会以外の活動主体がなかったのか。もう一つの疑問は、教科書やホームページには、「婦人会」という言葉は使用されず、「住民」「女性グループ」あるいは、「母親たち」と記されている。「婦人会」というコミュニティの特殊性についても触れる必要があるのではないか。

そこで、北九州市環境ミュージアム収蔵資料（閉架）66点を2021年5月より再調査した。本報告では、公害克服に寄与した活動主体の発掘に関する報告と関係者の証言から得た知見を紹介することを目的とする。

まずは、報告を進めるにあたって、婦人会をリードした当時の社会教育主事であった林えいだい氏、女性研究の第一人者の神崎智子氏の著書や論文を整理するところから始めたい。

1-2 婦人会の公害反対運動

2016年に神崎により発表された「北九州の公害克服の歴史を動かした戸畑婦人会の活動」は、詳細な文献研究とともに、当時の社会教育主事であるノンフィクション作家・林えいだい氏へのインタビュー、元北九州市議会議員木下憲定氏へのヒアリング調査も実施しており、貴重なオーラル・ヒストリーのもと研究がなされていた。筆者が調べた限りでは、2016年以降も類似の論文(Schrade,2018、神原,2020など)も皆無ではないが、神崎論文を超える新たな知見は見受けられなかった。

神崎(2016)は、冒頭で、「歴史が動くとき、歴史を動かすアクター(主因)、その時の状況(素因)、行為を行う引き金(誘因)の3つの要素が作用する」と述べた上で、特に、「戸畑婦人会というアクター」に注目し、公害反対運動が成功した誘因を考察することを目的としていた。しかし、神崎自身もアクターを「一口に戸畑婦人会とするのは正確ではなく」と述べている通り、まずは以下の視点から婦人会の公害反対運動を整理しておきたい。

1-2-1 舞台としての北九州市

北九州市は九州の玄関口に位置し、古来より交通・軍事・商業などの要衝として発展してきた。特に、明治以降は、筑豊の石炭資源の集散地として、鉄道や港湾が重点的に整備され、官営製鐵所(1901年創業開始)が八幡に建設された。その関連産業やさまざまな企業や工場が立地し、「石炭と鉄がつくった工業都市・港湾都市」として、門司・小倉・若松・八幡・戸畑の5市が成立、急速な発展をとげる。さらに、小倉城内を中心に軍事施設が集中し、北九州は軍都としての性格も強めていった。

北九州市は、1963(昭和38)年2月10日に門司・小倉・若松・八幡・戸畑5市が対等合併して誕生し、同年4月に九州初の政令指定都市となった。しかし、同時期、エネルギー革命と製鐵所合理化政策が進行し、北九州の産業経済は下降線をたどることとなる。また、全国的に公害が深刻化し、大きな社会問題となり、北九州も例外ではなかった。そして、1967(昭和42)年8月、公害対策基本法が成立する。

九州の拠点都市の性格は北九州市から福岡市に移行することとなるが、北九州市は工業都市としての蓄積を「ものづくりのまち」として発展させるとともに、公害克服のノウハウを生かした「環境未来都市」という新たな都市像を獲得していく。

1-2-2 アクター(主因)と活動場所の整理

アクターの舞台となる旧戸畑市は、炭鉱経営で財を成した安川敬一郎氏が私財を投じた明治専門学校(現九州工業大学)をはじめ、教育に熱心な土地柄であった。戦後は地区住民で組織する社会教育の振興を図るための地区社会教育運営委員会が組織、1952(昭和27)年の中央公民館の完成後、年次計画によって、1960(昭和35)年までにすべての小学校区に公民館が設置され、公設・地域運営という戸畑市独自の運営体制がとられることとなった。

しかし、「戸畑婦人会」による公害反対運動とひとくくり語ることは正確ではない。仮に、素因は同じだったにしても、アクターとアクターを動かす誘因は時期により違うのではないだろうか。ここでは、歴史を動かしたアクター(主因)と活動場所の整理をしておきたい。

神崎(2016)によると、以下の3期に整理することが可能である。

第1期(1950～1951) 中原婦人会 煤塵調査

第2期(1963～1964) 三六婦人会 煤塵調査

第3期(1965～1969) 戸畑区婦人会協議会 煤塵問題共同研究 「青空がほしい」運動

①第1期(1950～1951) 中原婦人会 煤塵調査

1950(昭和25)年に、中原(なかばる)婦人会が、煤塵調査(日本発電戸畑発電所の降灰調査)を行う。具体的には、同じ校区内で工場近くとかなり離れた4ヶ所を選んで、敷布とワイシャツの汚れの程度を観察するものである。ノリづけとノリづけをしないものを3ヶ月程度昼夜にわたって屋外に干し比較、その結果、「ノリづけしたものは汚染がひどく、いくら洗っても黄色いシミが残り、きれいにならない」とこと「工場の近くほど汚染度が高い」という結果に至ったという。

その調査結果をもって1951年、市議会に働きかけたとされているが、神崎(2016)は、『昭和二十六年臨時會戸畑市議會々議録』を根拠に「戸畑市議会の議事録には婦人会からの陳情の記録はなく、5月の臨時議会で中原出身の議員から降灰問題が持ち出されている」とし、非公式の働きかけだったのではないかと結論づけ、発電所幹部の妻への配慮により、婦人会からの陳情という形式をとらなかったのではないかと考察している。

②第2期(1963～1964) 三六婦人会 煤塵調査

人的環境と物的(活動の場)環境に加え、さらに1962(昭和37)年に活動を後押しする誘因となる、林えいだい氏が田川郡香春町役場から戸畑市教育委員会の社会教育主事に着任する。婦人学級の中で、「むずかしい理論をふりまわさなくて結構ですよ。もっと身近な、皆さんが今一番困っていることは何なのか。(中略)このように部屋中をよごす公害のことなんか、特に三六の場合、公害の問題を抜きにしては考えられないと思います…」(林,1971,p.47)という林の言葉から三六婦人会の活動は始まる。しかし、過去の中原婦人会が実施したワイシャツと敷布の調査と婦人会員を対象としたアンケート調査を中心とした学習活動は、常に順調に進んだわけではなかった(神崎,2016)。

1964(昭和39)年の新生活展の三六婦人会の展示コーナーに黒いケント紙にくり抜いて「青空がほしい」という文字が掲げられた。林のアイデアである。当時の様子を、元戸畑区婦人会協議会会長 毛利昭子氏は、「青空がほしい…と訴えた心にくいまでの演出効果に、(中略)戸畑の婦人会の公害問題の研究に、初めて方向づけをしてくれた人を見出した喜びはかくせなかった」(林,2017,pp.18-19)と林の著書に寄稿している。また、神崎もまた、「簡潔で、分かりやすく、的を射たこの言葉は、以後、婦人会の公害反対運動のキャッチフレーズとなった」(林,2017,p.161)と述べている。

このように、林のアイデアによる「青空がほしい」は、婦人会の活動の求心力を高めるキャッチフレーズであり、婦人会の活動の発展と継承を支えるものであったと考えることができる。このフレーズこそ、林の存在とともに、行為を行う引き金(誘因)といってもよいだろう。また「青空がほしい」は効果的なプロモーションのためのキャッチコピーとして今もなお残っている。

③第3期(1965～1969) 戸畑区婦人会協議会 煤塵問題共同研究 「青空がほしい」運動

1965(昭和40)年、煤塵調査は戸畑区婦人会協議会会長(13地区婦人会、会員総数6,900人)の共同研究となったが、林は報告書で、「三六のメンバー以外、公害問題についての認識は全くゼロであり、すべて新たな第一歩からの学習」(林,1971,p.101)と述べている。そのため、林の提案で各単位婦人会より1名、計13名で構成される公害問題専門委員会を設置されることとなった。この専門委員会は、宇部市の公害克服の取り組みや調査方法を山口大学の野瀬善勝教授に学ぶとともに、公害の基礎的知識とデータ収集・分析活動の進め方について三六のメンバーが講師として各地区の事前説明会に出向いた。また、区内の児童の病欠と大気汚染の関係に関する調査や死亡原因調査などの膨大な作業は、会員全員で担ったとのことである。戸畑区内組織的に運営がなされていたことを読み取る



ことができる。これらの活動のハイライトが1965(昭和40)年制作の8ミリ映画だった。

戸畑区婦人会協議会は1969年まで共同研究を継続し、『青空がほしいⅡ』から『青空がほしいⅤ』までをまとめているが、この間、この活動はマスコミにも頻繁に紹介され、全国的にも報道されるようになってきた。このようなメディアからの価値付けは、さらなる活動の誘因となったものと考えることができる。

一方、公害対策については、国レベルでも市レベルでも1970年に大きな転換期を迎える。国レベルでは、14の公害対策関連法が制定あるいは一部改正され、北九州市では公害防止条例が制定された。



第2章

もう一つの 「青空がほしい」

2-1 「ばい煙防止功労者」として表彰された 県立高等学校3校

北九州市衛生局より、1967(昭和42)年3月に刊行された『北九州市の公害』(第2号)に、以下のようなことが記載されていた。

各企業における公害防止施設の改善努力に関する市の報奨制度として、40年度から実施しており、前年度に引続いて、企業より推せんのおつた中より7名を表彰すると共に、合併後、工場施設診断員として公害対策行政推進上顕著な功績のおつた、九工大名誉教授 伊木貞雄氏、同大学教授 上滝貞氏、九州熱管理協会事務局長 中村嘉六氏に加え、団体として戸畑婦人会協議会、小倉高等学校科学部、小倉西高等学校社会科クラブ、小倉南高等学校社会科クラブ、個人として小倉放談会 宮野竹松氏をそれぞれ表彰した。

なお、表彰式のあと、婦人会・各高校の研究発表会が行なわれ、大気汚染の現状調査、紫川の汚染問題等自主的な調査資料が公表された。(原文ママ、下線は筆者加筆)

(北九州市衛生局,1967,p.133)

戸畑婦人会協議会と肩を並べ、福岡県立の3つの高等学校が「ばい煙防止功労者」として表彰され、1966(昭和41)年11月10日に実施された「公害調査研究発表会」にて研究を発表し、その抜粋が、『北九州市の公害』(第2号)の134～161ページに掲載されている。

3校の発表テーマ

- ①「紫川浄化問題」(S.41年調査) 福岡県立小倉南高等学校 社会部衛生班
- ②「紫川の水質検査」 福岡県立小倉高等学校 化学部
- ③「北九州市における大気汚染の現状～特に城山・米町地区の煤塵問題について～」 福岡県立小倉西高等学校 社会科クラブ

①と②については、紫川を対象とした調査であり、概要は以下の通りである。

①「紫川浄化問題」(S.41年調査) 福岡県立小倉南高等学校 社会部衛生班

小倉南高等学校は、アンケート調査も実施したようであるが、調査結果は割愛したとの付記がある。主な内容は、現在では北九州市民の憩いの場となっている紫川の浄化について、貴船橋～常盤橋の下水管数及び太さの調査と明治期からの人口、産業の変化が調査の中核を成していた。

戦時中までは、旧小倉軍事工場をはじめ、工場からの油分を含んだ汚水が大量に排水されていたが、戦後は工場だけでなく、家庭からの廃液が直接排水されており、紫川は下水道の役目を担っている。さらに、「私たちが調査した下水管の総数は102本だったが、未確認『特に不法建設の下』のものがあるため実数は若干これを上回る」(福岡県立小倉南高等学校 社会部衛生班,1967,p.138)と不法建築の建物に住む2500人の生活雑排水に調査は及んでいる。また、自然の希釈機能以上の汚水であることは自明であるが、八幡製鐵紫川水源地取水が拍車をかけていることにまで言及されていた。企業の姿勢や不法建築の居住者の生活権についても高校生が考えていることを読み取ることができた。さらに、公衆道徳の徹底など自身も含めた市民の自覚や協力についても述べられていた。この発表は社会科部

衛生班によるものであるが、衛生班以外にも社会問題についての調査研究がなされていたと思われる。

②「紫川の水質検査」 福岡県立小倉高等学校 化学部

本調査は、1952(昭和27)年と1965(昭和40)年、1966(昭和41)年の水質調査を比較したものである。いずれの年も夏季休業期間に紫川の複数の地点からサンプルを採水し、「塩酸イオン」「過マンガン酸カリ消費量」「硬度」「アンモニア・アンモニウムイオン」「硝酸塩、亜硝酸塩」「PH及びアルカリ度」「透明度」を測定、分析している。

1952(昭和27)年と1965(昭和40)年、1966(昭和41)年では、使用する試薬の違い、データ量、気象条件などから単純な比較は難しかったようである。ただし、項目ごとに、1965(昭和40)年と1966(昭和42)年の比較考察は行われており、「過マンガン酸カリ消費量の測定結果では、還元性有機物が増大していることがかなりはっきり出ている。アンモニウムイオンの検出も、またアルカリ度の高いこともそれを証拠だてている」と総括されていた。

③は、「大気汚染の生活に与える影響の実態を調査し、奪われた北九州市民の青空を地域ぐるみで、元の姿に戻すための実践」と目的に示されており、ここに、高校生によるもう一つの「青空がほしい」が存在したことを見いだすことができる。

2-2 福岡県立小倉西高等学校社会科クラブの実践 ～もう一つの「青空がほしい」

「北九州市における大気汚染の現状～特に城山・米町地区の煤塵問題について～」より、福岡県立小倉西高等学校社会科クラブの調査研究を紐解いてみる。

2-2-1 目的

目的は、次のように述べられている。

大気汚染の生活にあたる影響の実態を調査し、奪われた北九州市民の青空を地域ぐるみで、元の姿に戻すための実践活動の一端としたい。あわせてマスタープランの住宅地、工場地、交通網の適正化の基本指針としたい。

(福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ,1967,p.150)

市民主体の大気汚染の影響に関する実態調査を通して、青空を取り返すことにつなげていくという、いわゆる啓発活動の一端と理解することができる。一方、「マスタープラン」という文言からは、調査を通して政策提言につながる企図が見受けられたが、この発表資料では具体的に言及されていなかった。

2-2-2 実践活動の概要

「実践活動の概要」は、「(イ)布による煤塵調査」「(ロ)小学校児童に与える煤塵の影響」「(ハ)関心調査」「(ニ)工場の煤煙対策についての実態」の4点について12ページの紙幅で述べられていた。以下にそれぞれの要約を記すこととする。

(イ)布による煤塵調査

調査方法は、三六婦人会の布研究の方法を採用、15cm四方のサラシとブロード布を、雨の当たらない風通しの良い場所におき、その汚れ具合を検討している。調査地は、北九州市内32箇所、小倉区はクラブ員の自宅、他の区に関しては小学校等に調査協力を要請したとのことである。調査期間は、1966(昭和41)年3月8日～8月1日。

調査結果に関しては、「特に汚れ方が激しかったところは、八幡区の陣山小学校、八幡小、戸畑区の中町、門司区の錦町小などで、汚れのめだたなかった所は、小倉区の山本、葛原、八幡区の河内小」であったことが述べられていた。

この調査結果は、「等量降じん量図」*と一致しないこと、その理由として、布に付着しやすい成分と付着しにくい成分があることを述べた上で、「必ずしも『布による煤塵調査』が正確な資料とはいえませんが、大体煤煙の害による北九州の大気汚染の現状がいかにひどいものであるかということがわかりました」と結論づけている。高校生の真理を追求しようとする姿勢と学校の位置する小倉区以外の広範囲の調査をされたという点でも表彰に値するだろう。

*)「等量降じん量図」は、引用文献が記載されていないが、当時、九州工業大学名誉教授 伊木貞雄氏らの調査(「北九州市の大気汚染(第3報)」など)の「北九州市降塵量等高線」を参考にしていると思われる。

(ロ)小学校児童に与える煤塵の影響

こちらの調査も三六婦人会が行った小学校の児童病欠率と大気汚染の関係について、対象校を小倉区の工業地域の米町小学校に変え、「降じん量日本一の城山小学校」との比較した調査である。

調査結果より、「明らかに大気汚染が児童の病欠の一因をなしているものと思われます」と結論づけている。「ふだんはそれほど強く感じていない」という市民の意識が浮き彫りされた点が、この実践活動の大きな意味なのではないだろうか。

(ハ)関心調査

「関心調査」実施の背景については、次のように述べられていた。

我々が公害に関する本を読んで知るかぎり公害問題は被害者(住民)の公害に対する批判の声が盛り上がらなければ問題の解決はありえないという事実に着目し、北九州市民の関心を重要視し、関心調査にとりくみました。

(福岡県立小倉西高校社会科クラブ,1967,p.155)

この文章から、この時点では市民の公害に対する批判の声が盛り上がっていない状況であったことが読み取れた。また、婦人会による三六地区限定のアンケート調査も順調に進んでいなかった(神崎,2016)ことから、市民の北九州市の公害に対しての認知度に関する調査がなされていなかったと推察することができる。さらに深読みをするならば、当初より「関心調査」を通して、北九州市の公害に関しての認知度を高め、公害に対して何らかのアクションを起こすことを企図していたのかもしれない。

「関心調査」については、「Aアンケートによる小倉・八幡区民の関心度」「B実態調査による米町・城山地区民の現状」2つの調査が行われていた。

A)アンケートによる小倉・八幡区民の関心度

○目的:アンケートによる北九州市民の関心の程度の調査

○対象:高校生及び、小学校父兄(原文ママ)

【対象となった高等学校8校】

福岡県立門司北高等学校(現 福岡県立門司学園中学校・高等学校)、福岡県立小倉西高等学校、
福岡県立小倉商業高等学校、福岡県立北九州高等学校、北九州市立戸畑商業高校(現 北九州市立高等学校)、
福岡県立八幡工業高等学校、福岡県立八幡中央高等学校、福岡県立若松高等学校

【対象となった小学校10校】

北九州市立小森江西小学校、北九州市立門司小学校(現 北九州市立門司中央小学校)、
北九州市立日明小学校、北九州市立堺町小学校(現 北九州市立小倉中央小学校)、
北九州市立三六小学校(現 北九州市立あやめが丘小学校)、北九州市立大谷小学校、
北九州市立城山小学校(現 北九州市立黒崎中央小学校)、北九州市立槻田小学校、
北九州市立若松小学校(現 北九州市立若松中央小学校)、北九州市立二島小学校

○アンケートの配布時期と配布数及び回収率

「時期はS41年5月アンケートの配布枚数は約2,000枚。回収率は79.6%で約1,600枚回収することが出来ました」と記載されている。

高等学校8校と小学校10校の協力を得て実施されたアンケートであるが、コンピュータやSNSのない当時の高校生にとっては、大規模な調査であったと思われる。また、当時の高校生が調査に協力校をどのように組織したのだろうか。調査に至る背景については、明らかにされていない。

アンケートの質問項目の概要は以下の通りである。

住所・年齢・性別

1. 公害に関する記事を読みますか。(読む・読まない)
2. 今年の2月にスモッグ防止月間があったのを知っていますか。(知っている・知らない)
3. 煤煙による害がありますか。(ない・ある たとえば)
4. あなたの家にいる人で病気の方がいますか。(いない・いる〈ぜんそく、トラコーマ、その他〉 病名)
5. 東京においてスモッグ警報がだされたのを知っていますか。(知っている・知らない)
6. 知っている方は北九州市でもそれが必要だと思えますか。(思う・思わない)
7. あなたは移転したいと思えますか。(思う・思わない 理由:煤煙が多いから その他、自由記述)
8. 煤煙規制法があるのを知っていますか。(知っている・知らない)
9. 自由記述

(原文ママ)

このアンケート調査の最後に謝辞とともに「小倉西高校社会科クラブ 社会班」と記載されていた。社会班との記載から、他の班もあることが予想されるが、この報告からは読み取ることができなかった。

本報告では、当時の高校生が示した結果の分析・考察の概要は次のとおりである。

1. 公害に関する記事を読みますか。(読む・読まない)

- ・予想以上に公害の記事は読んでいる。
- ・小倉区民の方が、八幡区民より公害の記事を読む割合が高い。八幡区は広域であるため、城山地区民などは関心を示しているが、槻田地区民の関心が薄いため、八幡地区全体としておもしろい結果となった。
- ・その他の区(門司・戸畑・若松)のうち、戸畑区の割合が著しく高い。
- ・調査対象が、高校生及び小学校父兄であるため、男子20代と60歳以上、女子の20代と50代が少なく、割合がおかしくなっている。

「おもしろい」、「おかしい」などという表現の中に、当時の高校生の興味や関心による調査であることを読み取ることができた。一方、「割合がおかしくなっている」と、調査を客観的に分析している点も見逃せない。

2. 今年の2月にスモッグ防止月間があったのを知っていますか。(知っている・知らない)

8. 煤煙規制法があるのを知っていますか。(知っている・知らない)

- ・煤煙規制法を知っている者は60～65%である一方、スモッグ防止月間を知っているものは、45～50%である。市当局の一人相撲では何もならない。
- ・新聞その他のマスメディアを通じ報道されている“煤煙規制法”を知らない人が35～40%もいることは驚きである。

「スモッグ防止月間」が形骸化していないかという疑問を高校生が訴えているものと思われる。行政から市民への啓発についての提案と同時に、市民の「煤煙規制法」、「スモッグ防止月間」への意識の低さに「驚き」という文言に続けて、「なぜ知らないのだろうという疑問さえわいてくる」と市民の意識についての問いが述べられていた。その問いが次のパラグラフの「現在直接その害が市民生活にあらわれていない様な受けとめ方をしているのではなからうか」と続く。

5. 東京においてスモッグ警報がだされたのを知っていますか。(知っている・知らない)

6. 知っている方は北九州市でもそれが必要だと思えますか。(思う・思わない)

- ・東京のスモッグ警報の発令は予想以上の人(60～70%)が知っていた。そのうちの90%近くの人が北九州でも必要だと訴えている。
- ・しかし、スモッグ警報は煤煙規制法21条により県知事が権利を有し、北九州市長にはそれが無いということと、北九州にはまだ測候所がないということが対策の盲点ともいえると思える。

「煤煙規則法」とは、日本初の大気汚染防止に関する法律としては1962(昭和37)年に制定された。正式名称は、「ばい煙の排出の規制等に関する法律」である。

この法律は、ばい煙による汚染の著しい地域またはそのおそれのある地域を指定地域とし、指定地域内に設置されるばい煙発生施設について一定の排出基準を設けて、これを守る義務を課し、施設設置の際の届出義務、必要な場合に行政命令を

出す権限、和解の仲介制度などを規定していた。また特定有害物質を指定して、事故発生時の措置について規制していた。

1963(昭和38)年の一部改正では地方条例との関係が明確にされ、本法の規制対象とならない小規模のばい煙発生施設に関して、条例で必要な規制を定めることができるとされた。その後、1968(昭和41)年に制定された大気汚染防止法に吸収され、廃止となった。

ここでは、アンケート結果についても「90%近くの人が北九州でも必要だと訴えている」と述べられていた。「必要だと思っている」ではなく、「必要だと訴えている」という強い表現になっている背景には、スモッグ警報発令について、北九州市には権限がないことなどの課題があり、そこに切り込んでいきたい高校生の勢いを感じる。最後にまとめとして、次のことが述べられていた。

北九州市民は我々の予想以上に煤煙問題に関心をもっているが、市の対策などについては新聞、TVなどを通して報道されているが、知らない人が多いというわりきれない結果があらわれた。そして煤煙の害を自覚している人が少ないことが全体から感じられた。(原文ママ)
(福岡県立小倉西高校社会科クラブ,1967,p.158-159)

高校生の「わりきれない」という文言から、納得できない、残念な気持ちが表れていると読み取ることができた。また、昭和40年代前半の北九州市民は、「煤煙の害を自覚している人が少ない」という様相がアンケート調査の結果から明らかになったといえよう。

B)実態調査による米町・城山地区民の現状

文化祭での上記のアンケート調査発表後、直接、城山小学校(八幡区)と米町小学校(小倉区)の学区の地区民へのヒアリング調査を行なっている。下記の但し書きを付与した上で、結果を述べている。

米町小の場合、小学校自体は工場地域にあるのだが通学区(つまり米町地区民の住居)が小学校から離れたところにあつたため、工場地域(この場合汚染地区)としての住民の声は期待しものではなかつた。(原文ママ)
(福岡県立小倉西高校社会科クラブ,1967,p.159)

結果を要約すると次のようになる

- ・(城山地区)居住年数が浅い住民は煤塵問題に関して積極的な意見もあるが、長期間の居住により慣れやあきらめも感じられた。
- ・(米町地区)小学校の病欠率などから推察して害がないとは言えないが、“自分達の地域では煤塵の害があるとは思えない”との声が多かった。小学生も討論会などでは積極的に発言するが、予防活動となる受動的であり、継続性に欠けるように思われる。

米町地区住民の意識が、北九州市民全体を通しての代表意見ではないだろうか。関心が希薄なように思えると、高校生は結論づけていた。

(二)工場の煤煙対策についての実態

ヒアリング調査は大工場を対象としており、中小の工場に関しては実施していないので、「工場の煤煙対策についての実態」を述べることは危険であるが、我々が調査した範囲で」述べた上で、2点について言及されていた。

- ・大工場は煤煙規制法の提供を受けている施設があり、法律制定以前から集じん装置を設置している。
- ・陳情や苦情は調査時点では、皆無に等しく、公民館建設などの場合に、工場が協力した例もある。

これらの結果について、工場側は個々に法律を遵守することを重視しており、地区全体を俯瞰する視点を持たない点について「問題がないのであろうか」と高校生は問題提起し、「工場間の横の関係が大切と思われる」と結論づけている。また、公民館建設への協力については、「協力の意味が公害とどんな関係があるのか考えさせられるが」と疑問を呈している。この公民館建設とは、1961(昭和36)年三六公民館改築のうちに、日鉄化工からの寄付があったこと、この公民館が三六婦人会の公害学習の拠点であったこと(林,2017)についての疑問を呈したものである。

2-2-3 結果

「予想した以上に大気汚染という公害が大きい」結果を得た一方、市民は大気汚染についての関心は高いが、「煤煙の害」といつたものを自覚していない。したがって、その対策などの地域ぐるみの積極的な努力などもみられない」と結論づけられていた。つまり、当時の北九州市民は、大気汚染を自分ごととして捉え、行動するに至っていなかったということである。

また、具体的な方策として以下の2つを行政へ提案している。

- 1) 宇部市の成功事例を検討し、北九州市にも適用すること
- 2) 市民へのPRを強力に行うこと

さらに、具体的な方策以外にも高校生の強い思いが以下のように述べられていた。

我々が本などを読んで知る限りでは、公害問題は被害者の対策への努力がない限り解決の道はない(中略)北九州市の煤煙問題を解決し、失われた青空をとりもどすには、市民の被害者としての意識のてつてい、市当局は条例の制定などだけでなく、市民へのPRの強化などが具体的に考えられるが、本当の解決を望むならば、市民、産業経営者、行政者ひいては国家の行政者等の総合的な運動と対策が必要だと思われる。(原文ママ)

(福岡県立小倉西高校社会科クラブ,1967,p.160)

2-2-4 これからの研究活動

これからの研究活動として具体的に以下のことが述べられていた。

- ・アンケートを洗練されたものへ改良し、実施
- ・工場の対策、市の対策に関する調査の実施
- ・各学校との協力のもと、気象研究も合わせ地域の環境問題全体を視野に構想
- ・SO₃についての研究

また、「煤煙問題から出てくる住宅地、工場地、交通網の適正化の問題をマスタープランの位置付け」とマスタープラン、いわゆる「まちづくり」にも言及している。冒頭の目的でも「マスタープラン」という文言が使用されていたが、調査資料は、社会科クラブの実践・研究活動の一部にすぎないのかもしれないという疑問が残された。

第3章
もう一つの
「青空がほしい」
アクターへの
ヒアリング調査

3-1 いくつかの疑問と アクターへのヒアリング調査の必要性

前章にて福岡県立小倉西高等学校社会科クラブの調査研究の概要を紹介したが、以下のような疑問が生じた。

- ・広範囲で大規模な調査を可能とした組織
- ・マスタープランへの影響力
- ・高校生自身の一市民としての公害への感覚
- ・社会科クラブについて
- ・活動に向かうモチベーションの背景 など

そこで、関係者へのヒアリングを実施し、疑問を解き明かすこととした。

2021年7月5日に福岡県立小倉西高等学校を訪問、教頭Y先生に相談、Y先生より津苑会（同窓会）に問い合わせさせていただいた。津苑会より関係者を紹介していただき、2021年8月21日（土）にヒアリング調査を計画したが、感染症拡大防止の観点から、11月28日（日）に延期、実施に至った。

3-2 実施方法と資料

3-2-1 実施日時と場所

日時:2021年11月28日(日) 10:00～11:30
場所:北九州市環境ミュージアム会議室

3-2-2 対象者等

岡田和憲氏(福岡県立小倉西高等学校 1965(昭和40)年度卒業)
岡次明氏(福岡県立小倉西高等学校 1967(昭和42)年度卒業)
オブザーバー 関宣昭氏(NPO法人里山を考える会代表)

3-2-3 方法と資料

方法は、半構造化面接を用いた。半構造化面接とは、あらかじめ面接の目的や質問をある程度決めておき、状況や相談者の反応によって面接者が自由に質問を変えていく面接の一つの方法である。

発話に関しては、対象者の許可を得て、iPhoneのボイスメモに録音、後日、文字化した。文字数は、26,869文字、その他、フィールドノート、岡田氏が作成された資料、岡氏の提供による『響 NO.6 社会科クラブ創立10周年記念号』（福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ、1973）を資料とする。



3-3 結果と考察

3-3-1 公害調査研究発表会～林えいだい氏と高校生との関係性

岡氏に「北九州市における大気汚染の現状～特に城山・米町地区の煤塵問題について～」（福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ,1967）をご覧いただいた。岡氏は冊子を手にとると、「彼は結構いろいろ熱心で、いろいろな図書館とかだったら（中略）研究成果を受け取ってもらえるということで、いろいろなところに発信はした」という発言があった。「彼」とは、岡氏の同級生で当時の部長板井利男氏（故人）のことである。板井氏は、『響 NO.6』の中で発表の様子を次のように述べている。

部長としての仕事を始める前に私がしなければならなかったのは、北九州市衛生局公害課が公害防止月間の行事の一つとして行われる研究発表会での研究発表を依頼されていました。T君、Tさん、Fさん等と共に文化祭で発表した内容にS先生の指導の下に肉づけをして社会班の研究をまとめて、11月10日の研究発表会に臨みました。（中略）その時、吉田法晴市長の身長が思ったより低かったことははっきり覚えています。その他会場に、我々の研究に際して本当にお世話になった林えいだい氏の姿を見て心強く思ったこと、自分たちの発表の時はすっかり会場の雰囲気にも飲まれいつもより早口で捲し立て30分の持ち時間が余ってしまったことも記憶しています。（苗字は筆者がアルファベットに変更）
（板井,1973,p.14）

大舞台での緊張感の中、板井氏が発表をされたことが記されている。

また、林えいだい氏の助言を受けての研究であることがこの文章から明らかになった。特に、「(イ)布による煤煙調査」、「(ロ)小学校児童に与える煤煙の影響」は、婦人会の調査をもとに高校生が広範囲、大規模に実施したということである。岡氏は、婦人会の活動について「北九州全体という感じではないと思うんですね。ただ、一部のそういったところ。だから我々もどういふうに、上の方でどういふうに話してくれたかわからないんですけども（中略）もう協力もすごい協力してくれて」と語っている。プロセスは定かでないが、林とつながり、地域が限定されていた婦人会での実践を広範囲に広げていくために、婦人会の実践を北九州市全体に広げる役割を高校生が担ったと理解してもよいだろう。しかし、管見ではあるが、林の著書には、この高校生の活動に触れている記述は見当たらなかった。

3-3-2 なぜ、広範囲の調査活動が可能となったのか ～「北九州市高等学校郷土研究連盟」発足

発表会当時の部長 板井氏は、岡氏と同じ1967（昭和42）年度の卒業生である。発表に至るまでの社会科クラブの変遷と広範囲での調査活動を可能にした背景について探してみたい。

社会科クラブは、1963（昭和38）年に社会科同好会として発足した。同好会の発起人である岩井秀夫氏は当時のことを『響 NO.6』で次のように述べている。

元来、社会科に興味を持っていたものですからして、それでは一つのクラブを創ってみようと言う単純な発想から同好会づくりを始めたのでした。（中略）四月十三日同好会発会式、つごう七十数名の第一回会員として一躍西高一の大世帯が構成されたのです。（原文ママ）

（岩井,1973,pp2-3）

社会科同好会が「スタートした昭和38年に、北九州市が昔、五市が合併して」という岡田氏の語りにある通り、社会科同好会が発足した、1963（昭和38）年は、門司・小倉・若松・八幡・戸畑5市が合併し、北九州市が誕生した年でもあり、当時の高校生にとってもインパクトのある出来事で、このような状況が社会科同好会を推進する力になったことは想像にたやすい。岩井氏は続けて、次のように記している。

社会科同好会と言う名のもとに何となく人が集まり、少しずつ関心の意識が、やっと同好会の基礎づけになったと考えます。その勢いは、北九州市の五区から一校ずつを募り、「北九州市高等学校郷土研究連盟」を発足させ、そのリーダーシップをとったのは同好会発足後わずか八ヶ月と言う早さでした。統一テーマを決定、各校との共同研究の発表は翌年の文化祭ににぎわいを観せたものでした。

こうした会員各自の努力と言うものが、常識からでは批判される同好会発足一年半と言うものがクラブ昇格を実現させたのです。当時、延会員数三百を超えていたと記憶しております。（原文ママ）

（岩井,1993,p.3）

岡田氏は、自身が作成された資料を見ながら当時の様子を次のように語る。

当時の私の先輩の岩井さんという人がですね、環境問題に取り組んでやろうということで、発足したんですけど、テーマが大きかっただけに、自分たちの高校だけではとてもできないと、じゃあ広く呼びかけようということで、当時の門司だとか、それから八幡、若松、戸畑というところに、話を持ちかけてですね、そして快く引き受けてくれた学校がですね、ここの3番のかつこ2のところにある、私たち小倉西高がリーダーで、以下は門司北高校、戸畑高校、それから若松高校、八幡中央高校というのが協力しましょうということで、名乗りをあげて発足会を昭和30ええと7年だったかな、37年に集まってもらってですね、小倉西高に集まってもらって発足会をして、それからスタートしたんですよ。

また、岡田氏は、部員の人数について、「1年生の時に社会科同好会、同好会で発足したんですけども、その時、一級かつこ先輩の岩井さんが、岩井先輩がクラブに昇格させるということで、部員の数を募ったんですね」と部員を募り、クラブに昇格させる動きをした岩井氏の様子も語っている。

広範囲の調査活動が可能となった背景は、以下の3点に整理される。

- ①北九州市内の各区をカバーする5つの高等学校による「北九州市高等学校郷土研究連盟」が調査活動の母体である。
- ②その中心人物は、小倉西高等学校社会科同好会の発足者 岩井秀夫氏である。
- ③岩井氏は、当初より「環境問題」に取り組むことを企図していた。

一方、さらなる疑問も生じた。まずは、「環境問題」をテーマとしているにも関わらず、ネーミングは、「北九州市高等学校郷土研究連盟」であること。これについては、ヒアリングの冒頭で、岡田氏が「具体的な空気の流れをね」と語ると、岡氏が「左側をね」とそんなつぶやきがあった。また、なぜ、岩井氏が当初より「環境問題」をテーマとしたのか。これらの疑問は、次の章に譲ることとする。

3-3-3 当時の市民の公害に対する認識～当時の空気感と「慣れ」

「(ハ)関心調査」から、市民は煤煙問題に関心は持っているが、煤煙の害を自覚している人が少ないことが明らかになった。それは、長期間の居住により慣れやあきらめから生じるのではないかとこの考察もなされていた。

当時高校生だった岡田氏は次のように語る。

まあ当時の環境については、旧八幡製鐵所、及び住友金属だとかですね、八幡には、三菱化成っていうんですね、化成もあって、まあそこから立ち上る煙が七色の煙と当時は象徴されておったんですね。それをまあ街の発展、国の発展じゃないけれども、やはりみんながそれを公害だという人は、一人もいなかったんですけども、やはり家庭にあってはですね、あのう、その当時八幡、黒崎に住んでたんですけど、洗濯物がね、(中略)真っ黒になるんですよ。

北九州市の発展の象徴でもある「七色の煙」は、一方、住民を悩ませていた。岡田氏はさらに続ける。

旧八幡製鐵所だとか住友金属、先ほど言った三菱化成ですね、そこから立ち上ってくる七色の煙といますかね、これはもう本当すさまじかったですね。で、しょっちゅう光化学スモッグっていう警報が鳴らされて、その煙が上がった煙がですね、こうある一定の高さまでいったら落ち着いて横にたなびくんですね、それ以上上っていかないんですよ。で、そういうのはね、またいろんなピンクに見えたりね、いろんな色に見えて七色の煙だったんですね、それをやっぱり私たちは、街の発展っていう風にね、学校では教育されていた部分もあるんですけども、それが公害だと思う人間は一人もいなかったと思いますね、当時。

1963(昭和38)年には、日本製鐵(株)八幡製鐵所の人員は44,000人で、戦後の頂点に達したという。社宅は、水洗便所、ガス、水道が完備され、菅(2010)は、「当時の一般住宅の水準を遥かに凌駕する」ものだったと述べた上で、当時の様子を次のように続けている。

拠点社宅には、住宅・寮といった居住施設ばかりではなく、運動グラウンド、テニスコート、飲食のための従業員クラブがあり、購買会、購買部と呼ばれる、従業員およびその家族を対象に生活物資を廉価に販売する組織の分配所が設置されていた。さらに高見、平野には直営の診療所も設置される等、拠点社宅は排他的自己完結的コミュニティを形成していた。

(菅,2010,pp40-41)

当時の日本製鐵(株)だけでも、従業員が44,000人と一世帯約4人*とすると、176,000人、大企業は日本製鐵(株)だけではない。さらに関連企業も含めれば、市民の多くが大企業からの恩恵を得ていたことを理解することができる。また、上記の記述からは、一つの街として拠点社宅が機能していたと読み取ることができる。

学校教育でも、「七色の煙」は街の発展と教育されていた。さらに、極め付けは「北九州音頭」だと岡田氏は語る。「燃ゆる思いか北九州の 空に立つ虹 空に立つ虹 湧く煙 あ、黄金 黒金 五つの町の 息もそろって火が昇る～」とお話されていた。「北九州音頭」は、1963(昭和38)年に制作されており、市民の「煤塵の害の自覚」が低いという当時の高校生の研究結果と付合する。

北九州市時と風の博物館の常設展示室には、1976(昭和51)年、北九州市立折尾東小学校の春の運動会で6年生が「北九州音頭」を踊っている写真が掲載されている。つまり、昭和50年代に至っても、教育現場では、疑問を感じることなく、「七色の煙」は受け入れられていたということである。

*国勢調査(北九州市の人口の推移)によると、一世帯当たりの人員昭和35年は4.21、昭和40年は3.84であり、昭和38年については、おおよそ4人と判断し計算した。

批判的な意識を持ち合わせていなかった自身を振り返りながら、岡田氏は当時の認識を次のように語る。

あのう、緑ってのがなかったんですよ。で草木はね、その煤煙で汚れて黒くなっていたんですよ。だからあの色があのう普通の緑かなあと思ったりね、まあこれ極端ですけども、そういう風に思っていた時代もありましたね。それで、旅行なんかすると、全然緑の色が違うじゃないかと改めてそのう環境問題というものをね考えさせられる。

植物の葉の本来の色を見たことのない環境で育ってきたこと、煤煙の害がない地域へ旅行にでも行かない限り、置かれている状況を認識することが難しかったということである。「(ハ)関心調査 B)実態調査による米町・城山地区民の現状」の結果に、「(城山地区)居住年数が浅い住民は煤塵問題に関して積極的な意見も聞けるが、長期間の居住により慣れやあきらめも感じられた」とあるが、他地域からの転居者は煤塵問題に対して敏感であるが、徐々に慣れ、感じなくなる。比較する対象を持ち合わせていない子どもは、現状を受け入れるしかない。植物の緑を知らずに成長する。続けて岡田氏は次のように語る。

卒業してからです。この問題に取り組んでいる時には、健康被害につながってくるなんてことは思っていなかったんですよ。とにかく街の発展が優先されていたんですよ。だから、健康に害があるというような気持ちには至らなかったような記憶があります。だから、庭木が、葉っぱが黒くなっているもね、別にそれが体に影響あるなんてね、多少思っていたかもわからないけれども、そうは思っていなかったんですよ。

大規模な工場が林立している八幡区、黒崎区に居住し、公害問題に取り組んでいる岡田氏でも、大学進学を機に北九州市を離れて初めて問題状況に気付き、健康被害の認識を自分ごととして捉えることが可能となったと語る。「気持ちには至らなかった」という当時の空気感をくりかえし語られていた。また、門司区に程近い小倉区に居住していた岡氏も次のように述べている。

あっちの方にいると、我々なんかもそういう環境という面にあんまりそんな感じじゃなかったんですよ。ただ、よそに、私は大学になって熊本に行って、夜の空がこんなに明るいというか、星がいっぱいあるんだなあって感じたんですよ。そういうところはあるんですけど、そんなには、小倉でも端で門司の方に近いので、ですから感じはないですけども。

工場の比較的少ない地区であったにしても、夜の空に星が見えないほどの煙が立ち上っていたということである。大学生になって、熊本の夜空と比較してそれに初めて気付いたということを述べられている。

岡氏も当時の雰囲気について次のように語っている。

国全体でもあんまり大きく出てなかったと思うんですよ。だから本当に契機になったのは、私の記憶では昭和45年位。それはもう、その前から問題にはなっていたんですけど、45年にもう公害なんだっていうのが大きな声が上がってそれから防止法とかねそういったものに繋がっていたんだと思うんですけどね。だから我々が入って40年くらいの時というのは、結局まだ一部では婦人会とか、そういう意識があったんだけど、まだ全体的な声ではなかったと思う。ただそういった、私が言ったように、そういった問題はみなさんが意識をもったから、結局そういうお願いに行っても、アンケートを一緒にとって、ものすごく協力的だったと、だから今だから、先程アンケートが70、80%近いこれはもう非常にすごい回収率だと思う。

大きく動いたのは、公害対策基本法が成立した1967(昭和42)年8月以降である。当時は、公害を意識した人はごく一部ではあったが、生活の中での問題意識は持っており、調査に対して協力的だったのではないかと振り返っている。

当時の高校生の研究結果では、「公害問題は被害者の対策への努力がない限り解決の道はない」と述べた上で、「市民の被害者としての意識」について言及していたが、岡氏が述べている通り、市民は問題意識を持っていたのだろう。

被害者としての意識について、田宮(2021)は、婦人会の「青空がほしい」という活動は、社会教育からも評価を受け、全国的にも注目されていると述べた上で、「争いがなかった」という婦人会の公害追放運動の特徴に注目し、四日市市との比較検討を行っている。調査の結果、菅見ではあるが、北九州市では「訴訟」は見当たらないが、「争い」は存在したことを明らかにしている。一方、訴訟については、四日市市は、1959年の第1コンビナート稼働開始から2年後には、周辺地域に喘息患者が出始め、8年後の1967年には、四日市公害裁判が提訴に至っている。対して北九州市は、1901年の官営八幡製鐵所の操業から、時間をかけて工業地帯を形成してきた。そのため、長い時間の中での環境の変化に市民は慣れてしまい、健康被害等に関する訴訟がなかったのではないかと考察している。

3-3-4 社会科クラブの全容

300人を超える社会科クラブは、社会班、交通班、歴史班、タコマ班の4つの部会が組織され、活動していた。タコマとは、旧小倉市の姉妹都市タコマ市(アメリカワシントン州)のことである。現在も北九州市とは姉妹都市の関係にある地である。岡田氏提供の資料によると、岡田氏自身もなぜタコマ班を活動に加えたのかは定かではないとのことであった。また、岡氏も「我々の時もあったんですけども、我々の時はどちらかというと、社会班、交通班、歴史班だったんですよ。それで私は交通班だったんですけど」と語られていた。

岡田氏は、社会班について「社会班の活動について統一テーマで北九州市の公害についてですね、これは私たちの会長、初代の会長だった岩井っていう、私の一級先輩、まあこの問題に取り組もうではないかと」と語り、岩井氏についてさらに次のように続ける。

その当時そういう環境に対していち早くこう目をつけていたと思うんですよ。それが体に害がある云々ということまでには、至ってなかったかもわからないけれども、異常だということには感じてたんじゃないでしょうかね。それで、この問題に取り組んでみようということになったわけなんですよ。おそらく、それもね、この人小倉に住んでいたものですから、住友金属だとかですね、新日鐵のあれもずうっと影響のある所にいたんですけども、やはり兄弟だとか親だとかですね、地域の人からいろいろな情報が入って、こういうテーマについて取り組んでみよう、という所に至ったんだと思いますよ。この人非常に情報収集能力がすごかったですね。

岡田氏は、住友金属や新日鐵や影響のあるところに住んでいる自分よりも、影響の少ない小倉区香春口に自宅のあった岩井氏が異常と感じ、「岩井先輩もそれはつくづく感じてたんだと思うんですね。決して環境にはよくないというそういう強いものはもってたんだと思うんですよ」と続ける。環境への強い思いと情報収集能力に長けている高校生であったと評する。

また、高校時代には接点のなかった岡氏も岩井氏に関して次のように語る。

岩井さんというのは、我々入った時にもう卒業されていたので、あまり感覚はないんですけども、あとは話をいろいろ聞いてても、ちょっと変わった人やなあ、変わった人やなあというのは、とにかく我々は高校に入って大学に入るのが目標で、そういったことだけやったりゃいいよと親から、親が学問していないからそれだけやりなさいと、そんな感じでしていたんだけど、こういう幅広い…で見てて、それからもう一つ、だからそういうクラブを作って、それもクラブでも結局いろいろな班で(中略)各学年3、40名、100名以上いたっちゃうことですけども、そういうものを育てていったという、やっぱりそちらの方に、熱心にやったというのは、全然ね、普通の単なる高校生とは、ちょっと違うなあと意識はもっていた、それともう一つは、これはクラブのここに2番に書かれてますように、社会班、交通班、それから歴史班、タコマ班、こういういろいろなテーマにね、向かわれているんですよ。

岩井氏は大学入試という目の前の目標ではなく、もっと広い視野を持っており、人を育てることに注力した「単なる高校生ではない」と語られていた。

顧問について、岡田氏は「いやあ、(影響は)あんまりなかったです」と語り、「岩井さんの影響力、岩井先輩の影響力っていうのが一番大きかったですね。あの人が火つけ役だったんですよ。そして、火をつけてね、そしてひとつにまとまってやっていく、だからもういろんな発想がすごく豊かだったんですよ。先見性もあるしね、いろんなことに取り組んでいく」と続ける。

以上の語りから、岩井氏が、アクターとしての社会科クラブ部員を動かす誘因であったと言ってよいだろう。岩井氏の人物像を整理すると、以下のようになる。

- ・広い視野、先見性
- ・情報収集能力
- ・環境問題への強い思い
- ・人を育てる、まとめる
- ・行動力

高校生の域を超えた岩井氏の能力の源がどこにあるのか。こちらも次の章に譲ることとする。

誘因が岩井氏個人であることは明白であるが、社会科クラブ自体も誘因となっていることは見逃せない。小倉西高等学校

は、明治31(1898)年に小倉高等女学校として開校、戦前は福岡県における女子教育の草分け的な存在として重責を担い、戦後は学制改革のもと福岡県立小倉西高等学校として男女共学としてスタートした。岡氏は、「女性の方が、そういう生活に関して感度が強いんじゃないかと思った」と当時を振り返る。また、岡田氏は当時の社会科クラブについて次のように語っている。

女性の方が多かったですよ。私がね社会科クラブに入ったのは、元々西高ってのは女性が昔の小倉高等女学校ですから女性が多いところで、社会科同好会、当時のね、それに入る時には、女の子多いからというのがひとつ。(中略)女性は多かったんですけども、リーダーシップとるのはそこは男性が、リーダーシップとって行って、私の一級先輩の岩井さん発足させて、もうぐいぐいとひっぱっていましたね。女性はどちらかという、ついていくというようなね、本来の、本来の姿っていったら問題あるかもしれないけれど、そういう形になって行ってね。

社会科クラブへの入部は、女子部員が多かったことも一つの理由としてあげている。高校生の異性への関心は男女問わず、当然のことである。また、「問題があるかもしれないが」と断った上で、性別役割分担の意識が、当時は男女ともに強くあったことも語られていた。

3-3-5 社会科クラブの魅力

大掛かりな活動についての苦勞について問うと、岡田氏は次のように語る。

苦勞ってというのは、なかったですよ。逆にね楽しいことやっているから、まわりから見たら苦勞に見えたかもしれないけれども、逆に楽しくやったのがね、私なんかもう昔からそうだったんですけど、やる以上は楽しくやらないとね。いやいやならやるな、やらない方がいいと思っていたんですよ。そういう主義でずうっときてたもんですから、やはり、こういうクラブ活動にしても、とにかく楽しくやるということをモットーにしてですね、ずうっとやってきました。だから苦勞に感じたことってことは、全然なかったですね。

苦勞に感じたことはないという。例えば、「(ハ)関心調査」に関しては、5月にアンケート調査を実施し、文化祭で発表、その後ヒアリング調査を行なっている。部員の探究活動に巻き込まれていく様子を読み取ることができる。また、岡氏も社会科クラブについて次のように語る。

岡田さんも言われてるけど、私がこういうにクラブ活動やってて、これあまりあれやったんですけど、結局クラブ活動の中身だけじゃなくてもね、結構ねみんなクラブの仲間とはね、(中略)遊びに行ったりとか、そういう遊ぶというが集まりってよくやってたんですよ。例えば高校生だったと思うんですけど、先生がついて来てくれるからボーリングに行くとかね、スケートに行くとかね。あの当時はスケート場あったしね。(中略)親にとってみたらね、いつも休みの時、勉強もせんで出歩いてばかり、遊んでばかりで大丈夫かねと、もうそれをねよく言われた記憶があるんですけどね。だけど、そういう風にだからクラブ活動の仲間だけの、それ以外でもそういったレクリエーションっていうか、そういったことをやっぱりその仲間を中心にしてやってたというの、(中略)記憶に残っているっていうか、そういう仲間とのつながっていったらいいんですよ。

高校生にとってみると、活動を通じた仲間との関係性が魅力だったと省察されている。また、その関係性があるからこそ、活動も苦にならない。受験勉強だけでなく、一見、寄り道とも思える中に人生の中で大切なものがあるのかもしれない。岡田氏は次のようにも語っている。

やっぱりね、私はね何でも決めたことを一生懸命取り組んでやるというのが、やっぱり私は楽しさの秘訣なんじゃないかなと思ってるんですよ。だから私、今も地域活動の方もね引き続きやっているんですけど、やる以上は楽しくやる、そうするとね、まわりの、こう支援してくれる人が出てくるんですね。だから、高校時代に何かこうやってて自分自身が楽しんでやらないといけないというのが活動の源になっとったような気がします。まわりも楽しくなるしね。

一生懸命取り組むと楽しくなってくる。また、一生懸命にやっていると支援する人も出てくる。楽しそうにやっているから「部員もどんどん増えてきた」。岡田氏は、「完全燃焼」という言葉が好きだとも語っていた。また、レクリエーションだけでなく、離島研究も社会科クラブでは行われていたと岡田氏は続ける。

壱岐対馬に行ったりとか、姫島に行ったりとか、五島の五島列島の島に行ったりとかですね、そういうのをですね、たまたま先生がですね、地理の先生だった、顧問が。だから対馬なんか行くとね、リアス式海岸で、いろんな地形、自分自身が勉強したかったんかなあと思うくらいね。そんなんで。

岡氏も「好きだったんですよ。先生。私もだから、1年の時に、担任が社会科クラブの顧問だったから」と続け、地理の勉強につながっている活動もしていたことが述べられていた。顧問はいるが、社会科クラブの活動については、あまり影響力がなく、生徒が自主的に行っていたものであったことを両氏とも強調されていた。

*離島研究については1967(昭和42)年9月16日朝日新聞にも大きく取り上げられている。

3-3-6 マスタープランへの影響力

社会科クラブの実践の目的を再確認すると、一つは、「大気汚染の生活に与える影響の実態を調査し、奪われた北九州市民の青空を地域ぐるみで、元の姿に戻すための実践の一端」であり、もう一つは、「あわせてマスタープランの住宅地、工場地、交通網の適正化の基本指針としたい」とあったが、どのように理解したら良いのだろうか。

交通班に属していた岡氏は次のように語る。

我々は交通班ってことでやって、その時はだから大学の卒論と同じように、先輩のやったことを引き継いでやるんですよね。それで、我々は今度マスタープランとって、当時は道路の交通量調査とか、あとはその当時計画があったのはモノレールと地下鉄、どちらにするかとかあったんですけど。(中略)小倉ってのは、小倉の中、モノレール通ってますけれど、もともと小倉城のところまでは海だったんですよ。(中略)地盤があれだから地下鉄大丈夫かということになって、モノレールの方が有利だろうというような、そういったこともだから、いろいろ新聞とかで情報で集め、それで、その時は、我々モノレールの方が現実的なんだなあ、そんな風なことを発表して、そしたら、交通量調査。あの当時は今の3号線、ものすごい渋滞だったんですよ。まだ高速ができる前でね、そういったところを調べて交通網が道路と道路がこうとかねそういった調査とかもやって、したりはしてたんですけど。

1963(昭和38)年に創刊された北九州市市政だよりによると、1963(昭和38)年11月15日号には「マスタープランづくりへ 奥井調査会長らきまる」という記事、また、12月1日号には「市民の意見をマスタープランへ 総括委員97人きまる」、翌年1964(昭和39)年3月1日号には「マスタープランへ市民のこえを=懇談会から=」という記事が掲載されている。市民の意見の一端を高校生が担ったと理解してよいだろう。

さらに、1965(昭和40)年1月1日号は「百年の大計と市民のしあわせ実現へ あけゆく北九州市」「住みたくなる町 北九州市へ 座談会マスタープランの答申を終えて 市民のしあわせが基本」とタイトルがつけられており、記事もマスタープランについて①市民のしあわせが基本、②生活環境の整備がねらい、③市民参加が特色で、識者が語っているものであった。

その中で、特に注目すべき点は、生活環境の整備である。都留大治郎氏(マスタープラン専門委員・九州大学教授)は、「市民生活の中で、いちばん関心が深いのが、たとえば、ごみ・し尿の処理とか下水道はどうなるかといったことや、北九州市の場合は公害の問題もそのひとつですが…。このような問題を解決して、きれいな川や海、空をつくるということが、このプランの大きなねらいです」と述べている。公害に対する市民意識の醸成は途上ではあるが、マスタープランはその根幹をなすものであったようだ。加えて、「社会基盤、都市施設をどのようにするかというのも大きな問題です。北九州市が将来、大きく発展していくためには(中略)」と述べた上で北九州市だけでなく、広域をつなぐ鉄道や道路の整備の重要性についても強調されていた。市街地の再開発や市内を縦貫する輸送体系だけでなく、5万から10万人規模の団地でその中には商店や学校、病院などともに産業機能を持つ「パイロットコミュニティ」についても言及されていた。

1964(昭和39)年4月1日号には、「道路はまちの動脈 国道3号線バイパス 5月に小倉～戸畑間」との記事の、一方、9月1日号には、「力を入れる”足もと道路” ことし27キロメートルを舗装」が掲載されていた。「基幹道路」と「足もと道路」の両面の整備が必要であり、その一端を高校生の地道な調査が担っていたの可能性がある。ちなみに、1964(昭和39)年末現在、市内の公道の舗装率は11%で、全国平均よりは上まわっているが、東京都の66%、大阪47%、神戸市20%などと比較すると整備はかなり遅れている状況にあり、基幹道路としては、国道3号線、10号線、199号線、200号線のバイパスの建設が進められていた。1966(昭和41)年6月15日号「戸畑バイパスが開通 3号線のラッシュを緩和」、1965(昭和42)年2月1日号「あすの市内交通はモノレールで 第一次計画は小倉-黒崎間 市内環状線つくる」と記事が掲載されていた。岡氏らの実践も生かされていたと思われる。



岡氏は続けて、次のようなことも述べていた。

(板井氏は)2年生の時かな社会班のリーダーで、そしてあと全体の部長をやっててですね。(中略)その当時だから北九州市から、多分我々の時初めてだったと思うんですけども北九州市から補助じゃないですけど、年間にその当時のあれですか数万円ですかね、クラブがそんなに資金もない中で北九州市から確かその位の援助をしてもらって、そういったことで北九州市にもデータ渡すとかそういったことをやってたようですけどもね。

確かなことは、部長の板井氏でなければわからないが、社会科クラブは北九州市から補助をもらい、調査を重ね、そこで得たデータを北九州市に提供して欲しいということ語られた。この語りから、「我々の頃はそういう支援の、そこまではいってなかったですよ。発足した当初はね」と岡田氏。さらに、「やっぱりそういう活動をやっているちゅうことで、市もそういう着目してたんだと思うんですよ」と岡氏は続ける。

そして、岡田氏が「ああ、それがね、これが十周年の時(『響NO.6』)に出ていた。北九州衛生局の公害課っていうのが」と応えた。確かに、板井氏は、社会科クラブ創立10周年記念号の寄稿文の中で、「部長としての仕事を始める前に私がしなければならなかったことは、北九州市衛生局公害課が公害防止月間の行事の一つとして行われる研究発表会での研究発表が依頼されていました」と記述している。

岩井氏の社会科同好会発足から4年、岡氏が語られていた通り、北九州市も社会科クラブの実践に着目していたのだろう。



第4章
誘因となった
キーパーソンへの
ヒアリング調査

4-1 追加調査の必要性

岡田和憲氏、岡次明氏へのヒアリング調査から、アクターの中心人物は、発表会当時の部長板井利男氏(故人)であること、そして、その誘因となる人物が社会科同好会を発足させた岩井秀夫氏であることが明らかになった。しかし、以下の点については明らかになっていない。

- ・「環境問題」に取り組もうとした背景
- ・「北九州市高等学校郷土研究連盟」というネーミングについて
- ・タコマ班への思い
- ・北九州市も社会科クラブの実践に着目

そこで、岩井氏へのヒアリング調査を行うこととなった。

4-2 実施方法と資料

4-2-1 実施日時と場所

日時:2021年12月20日(月)10:00~12:00

場所:岩井秀夫氏自宅(金沢市)

4-2-2 対象者等

岩井秀夫氏(福岡県立小倉西高等学校 1964(昭和39)年度卒業)

岩井氏は、大学卒業後に渡米。現在、金沢市を拠点にイワイ学館を経営している。

4-2-3 方法と資料

方法は、半構造化面接を用いた。

ヒアリングは、対象者の許可を得て、iPhoneのボイスメモに録音、後日、文字化した。文字数は、23,519文字、その他、フィールドノーツを資料とする。加えて、岩井氏の資料の写真も参考とする。写真を見ながら半生をつぶさに語っていただいた。本報告では、特に社会科クラブの実践に関わる語りを中心に扱うこととする。掲載しきれない貴重な語りは別な機会に譲ることとした。

4-3 結果と考察

4-3-1 1961(昭和36)年 沖縄での体験から

～アメリカへの憧れと突きつけられた環境問題

岩井氏は北九州市小倉北区原町で3歳まで過ごし、母親が事業を興し、香春口に転居、高等学校卒業まで過ごす。中学校2年の時の体験が、人生の転機となる。

私の人生をかえたのが、中学2年生の終わり、3年になる前に、沖縄に行ったんですよ。でこれが私が沖縄に行って、その時鹿児島からの船の中で、2等、4人が乗る部屋、その時アメリカ人の方とそれからこの方、私と写真を撮ってくれた、ここの後ろは、たまたま同じ船に乗っていた早稲田大学の学生さんだった。で、外人がいるってことで私たちの部屋に遊びに来たんですよ。その時に撮った写真、で私の人生を変えたのは、この方です。で、まだ中学2年ですから英語も片言ですけども、同じ部屋で4人部屋だったんで、話、いろいろとするうちに、彼が沖縄に知ってる方にお迎えに来てもらって、この方が私をキャンプに連れて行ったんですよ。米軍のキャンプ。

で、この方はもう将校だったんです。降りた段階で車が来て迎えに来て、そして私に乗りなさいと、で一緒にいたむかいの人たちはおいていかれたんですよ。それで、将校の部屋、自分の家に連れて、そうした時はもうメイドさんもいたし、エアコンはあった、そういう部屋、キャンプの一戸建てでしたし、ショック受けましてね、私はまだ中学の2年のおわりでしょ。まだ日本の貧しい時代に、わあ、こんなに差があるのかと。

岩井氏が沖縄を訪問した1961(昭和36)年は、渡航にはパスポートが必須で、貨幣は米ドルだった。母親の仕事の関係者が鹿児島と沖縄におり、一人旅だったという。当時、クリスマスツリーを飾り、家族以外の大人も混じり、食卓を囲む写真などから、岩井氏の家庭は一般家庭よりもかなり裕福だったと思われる。それでも「こんなに差があるのかと思って、この方が私にカルチャーショックを与えたんです。これが第1回目の私の人生を変えたんですね」、「いつかアメリカに行ってみたいなと。とにかくまあ行ってみたいなあ、だったんです」とカルチャーショックと同時にアメリカへの憧れを抱いたという。さらに、「中学3年の時に、ウエストサイド物語の映画を見て、あれはもう爆発したんですね。よし、アメリカに行こう」と思いを強めていった。

社会科クラブに、なぜ「タコマ班」があったのかという岡田氏、岡氏の疑問は、岩井氏の語りから解消される。さらに、社会科同好会の発足についても沖縄での体験が強く影響している。

沖縄の海の水の美しさにびっくりしまして、こんなにきれいなのかと。ところが、もう北九州の川とか海とか汚いなあと。それが海も汚いなあとということで、普通は汚染、大気汚染とやらにやっぱりだぶってですね、沖縄のきれいなものを見てきているものだから。だからこの文化祭の時も、沖縄を紹介しているんですよ。紙粘土で沖縄の島を作ったりして。

沖縄の海の水の美しさへの感動とともに、北九州の川、海、大気汚染にはじめて気づく。他の中学生・高校生よりも先に、自然の美しさの頂点ともいえる沖縄の海や自然を体験することで、「環境問題」への高い意識と強い思いを抱くことができたのだろう。沖縄の自然を他の生徒にも伝えたいという思いが紙粘土での製作につながっていったと考えられる。

(高校)2年生の時に(中略)、津苑の編集も担当になってたんですよ。で見ると、社会科関係のクラブがないなあと、同好会しかないなあと。これ作ってやろうと、で私が言い出したんですよ。

『津苑』という学校誌を編集に携わることことがきっかけで、社会科同好会が発足したとのことである。

4-3-2 社会科同好会立ち上げの苦労～学生運動とは一線を画す

1960年代は、1960(昭和35)年の日米安保保障条約改定をめぐる反対運動を通して学生運動が盛んになった時期である。社会科同好会を4班にした理由もそこからきている。

ただの一つだけの部にしてはだめだ。当時ですね、部を作る状態、同好会、社会科、ものすごく学校自体が危険視したんですよ。(中略)だから、真っ向から反対であの、いわゆる顧問になる先生いなかったんです。だけど、私が私の作る同好会っていうのは、そういう社会問題は、いわゆる政治批判的問題じゃないんだ、純粋に郷土のことについての研究するグループを作りたいと、そういうことでやってきて、なんとか説得して、今言ったみたいな産業班とかですね、交通班とか、そういう名前に変えていった…、そういう班にして、やらしてくれと、で始まったんです。

目的がはっきりわかる班名をつけ、学生運動とは一線を画した同好会であるということをしつかりと訴えということである。また、「北九州市高等学校郷土研究連盟」というネーミングも同様で、「その方が政治的なあれもない」と政治的にも勘ぐられないですむということを述べられていた。

しかし、岩井氏は最初から「郷土研究」ではなく、具体的には、煤塵調査について扱うつもりだったと次のように述べている。



(写真を見ながら)
これで西高で集めて、だから私真ん中に座っています。これ開いたのは、(公害調査は)もう小倉だけではだめだと。特に問題は八幡だと。八幡を取り込むためには、八幡の…若松汚いし、戸畑も汚いし。残ったのは門司だけでしょ。関係ないけど…。

4-3-3 社会科同好会の急拡大の背景

～楽しさを共有できる仲間の存在、活動の魅力

1年半でのべ会員数300名を超える同好会となった背景はどこにあるのだろうか。

岩井氏は、「実は私が社会科同好会を最初集める時には、人数はある程度ないと同好会認められないでしょ、で、私の友人たちをちょこちょこ集めて、それこそ15人位しかなかったんです」と語っているが、当時の様子について、岩井氏と同学年で、ともに創立者の一人で、2代目の会長であるK氏は、『響 NO.6』に次のように記している。

そのころの西高は、(中略)まだ、高女時代の良妻賢母型の教育、そういう校風を私達男子学生にも漂わせていた。(中略)私達はアカデミックな事柄に憧れていたのであった。(中略)内容(研究対象)はさておき、私達は、まず形を作ることに専念した。(中略)形が、一応できたので、いよいよ研究対象の問題であるが、私達は大きく分けて、一、歴史班・二、産業班・三、タコマ班(小倉の姉妹都市)それも『郷土小倉』という焦点を、しぼることにした。(中略)歴史班はよく古墳を見にいたり、寺巡りをしたりしていたし、産業班は工場見学をしたり本をあさったりした。又タコマ班といえば、タコマ市の青年達と文通をしていた。(原文ママ)

(K,1973,p.7)

社会科同好会発足当初は、組織も名前も違っていたことがわかる。K氏が2代目の会長を務めていた1964(昭和39)年度は、環境問題への取り組みはなされていなかったようだ。それよりも「同好会創立記念の植樹祭をやったり、他の人たち他のクラブ同好会に対してのデモンストレーション」を行い、同好会からクラブへの昇格を企図した働きがやや多かったように思うと書かれていた。

岩井氏は、新入生募集の時の思い出を次のように語っている。

はじめてのいわゆる新入生を入れる時に、(中略)社会科同好会の会員を募集する演説をやったんです。その時がまた面白かったのが、今でも覚えているんですよ、普通は皆各部の人たちが演壇に上がって自分のいろんな部の挨拶をするでしょ、私は一番後ろから手を叩きながら入っていったんですよ。真ん中。誰だこの人、変な…そして演壇に上がって、社会科の重要性ってのをしゃべったんです。社会科、これからはやっぱりそういう身近なものからいろんなものに興味を持っていかねければいかんだよと、で社会科同好会の。

このような岩井氏について、転居のため、高校への在籍は1年、クラブでの実働は半年足らずだった女子学生だったH氏は次のように述べている。

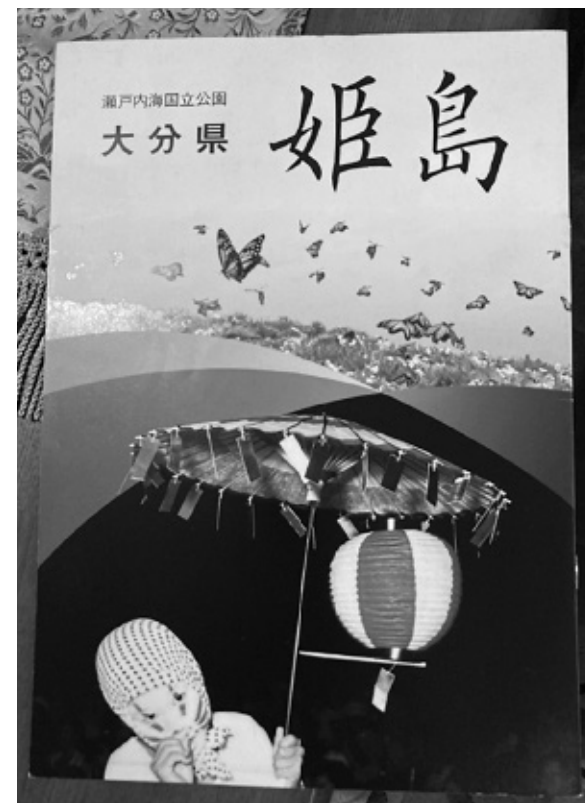
当時、初代部長(会長)の岩井さんの魅力(?)にひかれ、何かやってみたいという人達がワイワイ集まっていた様に思います。とにかく、けっさくなグループで真面目に悩んだり、考えてりしながらも、皆それぞれに楽しかったものです。(中略)「からすてんぐ」とか、「いなか代議士」とか言われていた岩井さんのへんてこりんな、言うに言えない魅力とも強引さともつかぬものに、振り回されて動いていたのが、実情ってところでした。

その一例ですが、夏休みも半ば頃、突然、岩井さんより招集をうけ、学校に集まりますと…「姫島にゆくことに決めた」というのです。ところが、我々にしてみれば、その姫島とやらへ、何しにゆくものやら、先ず、一体その島なるものが、どこにあるのやら、皆わからないといった具合で、ポカンとして彼の言うことに聞き入り、いつの間にか何となく、わかったような気にさせられ、「では行こう」ということになりました。万事がこんな調子でした。(原文ママ)

(H,1973,pp.8-9)

当時の岩井氏がどのような様子だったか、他者からの評価の垣間を見ることができる。H氏は姫島調査に至るプロセスが印象的だったと思われるが、離島調査については、岡田氏も「壱岐対馬に行ったりとか、姫島に行ったりとか、五島の五島列島の島に行ったりだとかです」と述べられていた。この調査も岩井氏からの発案であったことがH氏の記述から明らかになった。そこに、地理を専門とする顧問の先生も加わり、学習活動に深みが加わった。

離島研究について、岩井氏は次のように語っている。



(離島に)興味があったんですよ。(中略)離島の生活ってものを少しね、街中にばかり住んでてあれだからって、離島の、ちょっと待ってください。…あっこれ、これです。じゅう…に東京都、東京都庁に行って、貰っている、たまたまパンフレット置いてあったんです。これを私がそれこそ58年前にこの姫島の調査をしようと。(中略)もう、その頃からそういうこと、言ってたんです。今こんなになっているんです。(中略)姫島調査、これがすごく人気よかったんで、私が出た翌年は岡田たちの時には対馬に行ってます。(中略)これが大成功したって、ですね。

姫島は、水産業と観光を基幹産業とする大分県唯一の一島一村の離島である。このパンフレットや現在の姫島村ホームページでは、「詩情と伝説に包まれた島」がキャッチフレーズで観光地、姫島をPRしているが、当時の状況はどうだったのか。

高橋(2021)によると、1960年代に離島を対象とした旅行ブーム、いわゆる「離島ブーム」は若者の間で起き、1980年代まで続いたという。高橋の先行研究の調査によれば、伊豆諸島で離島ブームが始まったのが、1965年頃とされており、大島以外の伊豆諸島にも観光客が訪れるようになったとされている。つまり、社会科同好会の姫島調査は、「離島ブーム」の先駆けともいえるものだったのではないだろうか。

「大成功」の内容について岩井氏は直接語られていなかったが、次のことが考えられる。

一つは、自身の沖縄での経験から、同好会のメンバーにも、北九州市以外の自然や生活などの体験してもらい、気づきを促したかったのではないだろうか。大気汚染の調査を実践したのは、板井氏、岡氏の学年であり、岩井氏は携わっていない。岩井氏自身も「私の方はもう最初のやんなさいとかね」「提案だけ」「具体的に研究しろ」といっただけで、板井氏の社会班の実践や岡氏の交通班の実践については「そこらになってくると、私もわからないんです」と語っていた。

もう一つは、離島調査により、部員が急増したことである。

岩井氏は、北九州市の環境問題を研究するための仕組みをつくり、人を集め、研究に没頭する状況をつくることに専念したと人物であることが明らかになってきた。

4-3-4 北九州市との関係性 ～ 社会科クラブの発展の基盤をつくる

写真を見ながら、岩井氏は、市長とのテレビ対談について、次のように語られていた。



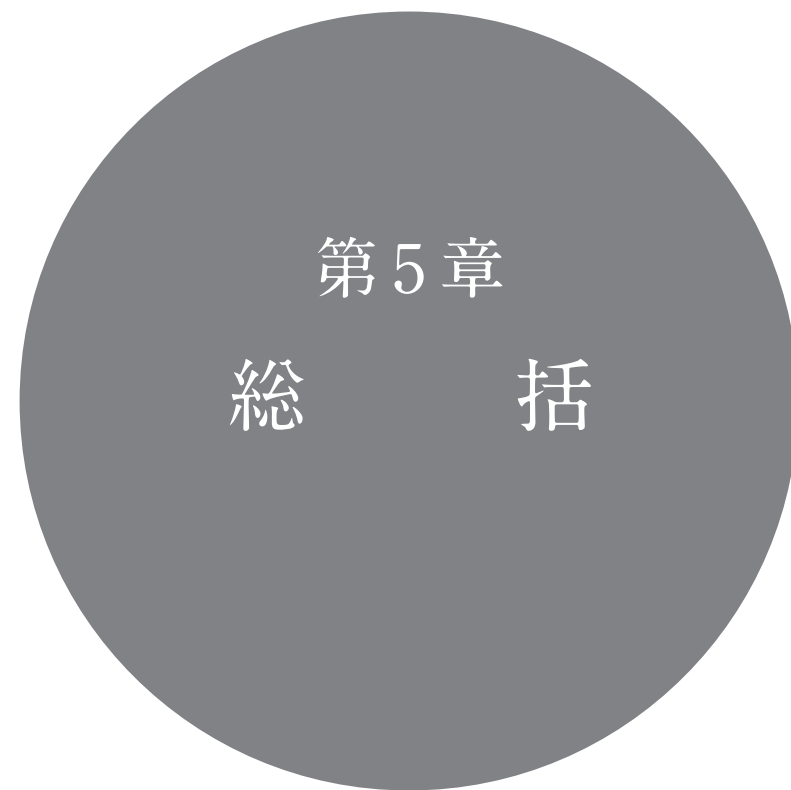
これがテレビに出てる。市長と対談です。北九州市長との対談。(中略)3年だと。私ここにおりますよ。市長さんが真ん中におります。その写真…あ、ここにあります。…市長、(中略)この二人は、私の西高から出てきたんです。(中略)後はどっか誰かの、これ知りません。おそらく婦人会関係かもわかりません。おそらくこの時はもう汚染問題やってたんじゃないですか。

婦人会関係者も出演していることから、大気汚染の問題についての対談だったことが推測される。

また、「カルチャーショックと同時にアメリカへの憧れ」という沖縄での体験から生まれたタコマ班であるが、前述の2代目の会長であるK氏は、『響 NO.6』で「ちょうど私が会長の頃、タコマ氏の市長が、小倉に来られていたので、某ホテルで会談したことがある」との記述から、社会科同好会として公の場に出る機会も少なくなかったのではないだろうか。

このように、岩井は校内だけでなく、北九州市とのつながり、クラブ昇格後の発展の礎を築いていったと思われる。





第5章
総括

神崎(2016)の論文の冒頭に「1950～60年代、戸畑婦人会が公害反対運動を展開し、行政と企業を動かし公害を克服した」と言及している。確かに戸畑婦人会が「公害克服の歴史を動かすアクター」であったことは否定する余地もない。しかし、市民、行政、企業のパートナーシップのもとで公害を克服してきたと語られる「市民」が婦人会ではなかったというところが本報告の中核をなす。発掘された高校生による研究が、全市にわたる大規模調査で、市民の問題意識の喚起という点でも大きな功績があったと思われる。この高校生の調査研究も公害克服の市民の活動として注目に値するのではないだろうか。また、本報告において、社会科クラブの活動にも婦人会の活動のキーパーソンであった林えいだい氏も関わっていたこと、そのクラブで行っていた調査結果を行政がマスタープランに生かしていたことも明らかになった。さらに、その背景にある当時の高校生の心情も浮き彫りになった。

一方、本報告の課題としての以下の2点が残された。

一つは、報告冒頭での問いである。公害克服のストーリーを語るときに、「婦人会」ではなく、「市民」「女性グループ」「母親たち」として語られることが最近多くなってきた。この報告では、それぞれのコミュニティの違いについては言及されていない。「婦人会」は、地縁によるコミュニティであることは自明のことである。ある程度の強制力も伴うことも想像できる。それを「市民」「女性グループ」「母親たち」として語るのが適切なのだろうか。また、婦人会と高校生の社会科クラブとのコミュニティの比較も行われていない。高校生は、同じ目的意識を持った者が集まり、活動を始めている。そこには、自発的であると同時に、「楽しさ」「自由」などが付随し、結果的に「学び」つながるものであった。両者の比較も十分になされていない。

もう一つは、社会科クラブが行った調査研究は、現在の「総合的な探究の時間」の好事例と思われるがその点は触れられていない。また、ESD(Education for Sustainable Development:持続可能な社会の創り手を育む教育)という点からも考察する価値があるだろう。

最後に、社会科同好会の3代目の会長U氏は、『響 NO.6』にて、「西高の文化クラブの中でのその活動範囲の広さ、実行力という面では抜けた存在であった。それ故他のクラブの者からよく“あのクラブは行動が派手だ”とか“レクリエーションが多過ぎる”など批判されたこともあった。たしかに行動自体も派手であったし、みなを輪を保つためによくレクリエーションもした。でも我々同好会員はどのクラブにも増して団結力があつた。一つの目標に向かって全員が動いていた、理屈を言う前に実行していた」(p.10)と述べ、産業班では「北九州市の商品流通及び公害問題を大々的に取り上げ」(p.10)、交通班では「市内の交通量増加に伴う経済成長度及市のマスタープラン」(p.10)など、クラブ昇格前より、活発な活動がなされていた。

また、第六期部長S氏は、「一つの大きな思想を持たらしてくれたクラブ生活を“一つの思い出”という呼びかたでは、どうしてもかたづけられない」(p.11)と述べ、「あの真剣で純粋に何かを追求しようとし、お互いの中に心の触れ合いを観ようとしていた」と自身を振り返っていた。同好会からクラブに昇格し、活動も拡大する時期にあつて、「部長が、一期の間に三人にもかわり、部員の出入りが激しく、おまけに内部解散にまで至ったという事実も、今思い出すと確かにクラブ史の一端でした。先輩と後輩、そして同僚との間の人間的な暖かみに、それらの中に浮かび来る人間模様の新鮮さと複雑さに、そして、各班のテーマに沿った研究活動の追求の努力と、他校や他機関との接触の中には、実に現世界の社会生活の縮図ともいえる変化が、自ら展開されているようでした」(原文ママ)(p.11)と変化の大きい思春期の後半を省察されていた。

社会科同好会、社会科クラブでの経験が人生にどのような影響を及ぼしたかという点についても、ヒアリング調査内で語っていただいている。生き方を問う経験であったことに相違ないだろう。今を生きるユースにエールを送るストーリーは別な機会に紹介したい。

引用・参考文献

伊木貞雄・細川義二郎・鹿毛明子「北九州市の大気汚染(第3報)」
<https://core.ac.uk/download/147424449.pdf>(2023年1月18日閲覧)

岩井秀夫(1973)「新たな親交を期して」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6.pp-2-3

U(1973)「私の部長時代」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6,pp10-11

K(1973)「社会科同好会のこと」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6,pp7-8

神崎智子(2016)「北九州の公害克服の歴史を動かした戸畑婦人会の活動」アジア女性研究25号 pp.73-91

神原 理(2020)「戸畑婦人会による公害反対運動から得られる示唆」専修大学社会科学研究所 No.686・687 pp.53-61

菅 和彦(2010)「八幡製鐵所の官舎・社宅開発と市街地形成」都市住宅学 68号 2010 WINTER

独立行政法人 環境再生保全機構「ばい煙の排出の規制等に関する法律の成立(1962年)」
https://www.erca.go.jp/yobou/taiki/rekishi/02_03.html(2023年1月18日閲覧)

岸本 千佳司(2011)「戦後北九州における持続可能な地域づくりー公害克服からスマートコミュニティ創造へ「北九州方式」の展開ー」東アジアの視点 第22巻1号, pp.23-36

北九州市衛生局(1967)『北九州の公害 第2号』

北九州市「公害克服への取り組み」
https://www.city.kitakyushu.lg.jp/kankyoku/file_0269.html

北九州市「タコマ市について」
https://www.city.kitakyushu.lg.jp/soumu/file_0234.html

北九州市「市政だよりデジタルアーカイブ」
<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/page/dayori-arc/>

北九州市 時と風の博物館 常設展示室
<https://www.kitakyushu-museum.jp/resources/269>

小林宏己・大石 学(監修)(2019)『小学社会5』教育出版

板井利男(1973)「私の社会科クラブ」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6,pp.13-14

S(1973)「私にとっての社会科クラブ」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6,pp11-12

Anna Schrade(鈴木 玲訳)(2018)「北九州の「青空がほしい」公害反対運動に おける主婦の活動」大原社会問題研究所雑誌No.713 pp.23-31

高橋環太郎(2021)「島嶼地域における離島ブームの広がり方に関する考察:離島ブーム時における伊豆諸島を事例に」長崎県立大学論集(経営学部・地域創造学部)第54巻第4号pp.1-16

田宮佳奈(2021)「北九州市公害克服に関する再調査ワーキンググループの進捗状況報告」全国幼児教育ESDフォーラム2021ポスター発表資料,p.16

林えいだい(1971)『八幡の公害』朝日新聞社

林えいだい(2017)『《写真記録》これが公害だ 北九州市「青空がほしい」運動の軌跡』新評論

日比野利信(2021)「テーマ1北九州の概要 北九州市の成り立ち」北九州市ミュージアムパーク関連企画展北九州・産業都市の軌跡

H(1973)「今後のクラブに望む事」福岡県立小倉西高等学校社会科クラブ 響NO.6,pp8-9

姫島村ホームページ
<https://www.himeshima.jp/>

福岡県立小倉高校化学部(1967)「紫川の水質調査」北九州の公害第2号,pp.134-141

福岡県立小倉西高校社会科クラブ(1967)「北九州市における大気汚染の現状:特に城山・米町地区の煤煙問題について」北九州の公害第2号,pp.150-161

福岡県立小倉西高等学校同窓会津苑会ホームページ
<https://shinenkai.com/>

福岡県立小倉西高等学校ホームページ「120年の歴史」
http://kokuranishi.fku.ed.jp/one_html3/pub/default.aspx?c_id=94

福岡県立小倉南高校社会部衛生班(1967)「紫川浄化問題」北九州の公害第2号,pp.134-141

謝 辞

閉架資料の閲覧を快諾してくださいました北九州市環境ミュージアム、研究活動を支えてくださった特定非営利活動法人 里山を考える会、ヒアリング調査の実現に向けてご尽力いただきました福岡県立小倉西高等学校、同窓会 津苑会、ヒアリング調査にご協力いただきました岡田和憲さま、岡 次明さま、岩井秀夫さま、ありがとうございました。

長田真奈美さまには、資料整理等に汗をかいていただきました。

本研究にご協力をいただきましたみなさまにあらためて感謝申し上げます。

令和5年3月

静岡大学教授 田宮 縁

謝 辞

里山を考える会は皆様のご支援のおかげでNPO法人として20周年を迎えることができました。

現在の物や量を中心に動いた成長社会から成熟社会へと移行する中では、これまでにない社会課題が山積しています。その課題を解決するために、私たちは環境ミュージアムを指定管理者として運営し、「青空がほしい」活動を環境市民力、社会を変える力として、大いに学んでまいりました。

そんな中で、「私ごと」を「私たちごと」として、また「私たちごと」を「私ごと」して活動、行動を实践された50年前の青年の活動が作り上げた現在（未来）の存在を、静岡大学田宮先生のお力をお借りして知ることができたのは、私たちにとって新たな発見でありました。

この発見を調査し、里山を考える会の20周年記念事業としてまとめることは、「私ごと」を「私たちごと」として、皆様と学び（課題）を共有し、互いに行動するための良い契機になると信じて、ここに報告書として発行させていただきます。

最後になりますが、田宮先生のご熱心な探究心が無くてはこの報告書の完成は有りませんでした。感謝いたします。

またこの報告書の作成ために、小倉西高校OBの方をはじめ多くの方にご協力いただきました。ありがとうございました。特に取材にご協力いただいた、岡田 和憲様、岡 次明様、岩井 秀夫様心より感謝いたします。当時高校生で活動されたみなさまに敬意を表するとともに、その活動が次世代に引き継がれることを切に願っております。

令和5年3月

特定非営利活動法人 里山を考える会 理事 関 宣昭